

金は溜めずとも、不自由はしていない。これが現在の心境です。

## 満州・中支（芷江作戦）従軍記

岩手県 菊地 卯三

―菊地さんは、中支軍の弾兵団だと聞いていましたが、支那事変前に朝鮮で勤務されていたのですか。

私は大正四年十一月十日、胆沢郡の現前沢町古城で生れ、昭和十年徴集兵です。甲種合格により、昭和十年十二月十日、朝鮮羅南の歩兵第七十三連隊に入営したのです。当時、宇垣軍縮の余波でもあつてか、青年学校卒業者は、帰休というのか、兵役期間短縮というのか、昭和十一年六月には満期ということだったので、す。

ところが、私たち第六中隊は師団命令により応急派兵ということで、満州に近い所の茂山守備隊に派遣されたのです。戦闘で二、三人負傷はしたが、敵情は思

つた程悪くはなかつた。

相手は、金日成軍とのこと、その後、奥の三長守備隊を根拠地として、白頭山の北側の方へ行った。山の中に天幕を張って二昼夜ぐらい警備したが何も無く、七月まで警備をしていたが、師団長閣下が臨検に來られ、整列してこれを迎え検閲を受けました。

そのとき、師団長一行を四台のトラックで送つたが、朝鮮国境の豆満江右岸で、四台が転落し佐藤少尉等四人が死に、我々留守部隊は急拠救助に向かった。師団長の車と、護衛車は大丈夫だったが、前後の車が落ちた。死んだ佐藤少尉は初年兵の時の教官であつたので、これが事故扱いか戦死なのかと心配した記憶がありました。私たちは警備を終了、七月末頃羅南へ原隊復帰したのです。

応急派兵任務を終えた第六中隊の、我々同年兵は今度こそ満期除隊と喜んでいたのですが、私たち五人の伍長勤務上等兵は引続き臨時召集、伍長任官となり内地帰還はまた延期となつてしまつたのです。

その当時（昭和十二年まで）朝鮮の入営は一年二期、

十二月と翌年六月だったので。そのため、十二月十日に初年兵が入営し、その教育助教を命ぜられた。十二年七月には、支那事変勃発などあり、支那、満州へ下士官が派遣されたわけです。我々仲間も、故郷へ帰りたい気持ちはあるが、「我々は力のある限りやろう」と決心し、三カ月の初年兵教育を終え、四月二十日頃、ようやく召集解除となりました。

朝鮮羅南の営門から、直接帰郷するわけです。軍服や靴など官物一切は隊へ置いて帰らねばならぬ。極端にいうと、私は禪一丁というわけです。しかし、その辺はうまく出来ていて、満期前に隊に出入りの業者が注文に応じてそろえてくれるのです。私たちは、満期服（私物の軍服）を着て、トランクを持って営門を出て、五人一緒に東京に着き、それぞれの故郷へ帰りました。

私が除隊した昭和十三年から、朝鮮は一期入営となるし、階級も、持務曹長が准尉に、伍長と上等兵の間に兵長が出来た。いろいろ世界や、日本の情勢が変化しはじめた時で、我等の初年兵の時、昭和十一年二月

二十六日、あの「二・二六事件」がありました。この話は、その日の朝でしたか、講堂で聞かされた。

私が除隊前、停車場司令部にいた時、朝鮮から支那へ、あるいは内地から支那へ派遣された私の軍の輸送警備のためか、支那事変に関係したためか、「支那事変論功行賞」で、賜金八十円と従軍徽章、赤十字徽章を頂いた。しかし勲章とまではいきませんでした。

―除隊後はどうされたのですか、大東亜戦争での召集は何時頃でしたか。

家に帰って農業をやっていたが、青年学校や在郷軍人会などに出たりして、特に青年学校の先輩であり下士官だったためか、軍隊時代の話をさせられたりしました。そのうち、大戦もだんだん激しくなり軍国主義というか、内地も非常時ということで、青年学校の指導員を村長から命ぜられ、若い人たちの軍事教練などをしていました。私は当時、測量などの地方技術員をしていたが、昭和十八年になってからは青年学校専任指導員となり、同十九年の召集まで勤務していたのです。

それでは召集になってからの話をしますが、除隊後七年目に初めて召集令状が来ました。それは忘れもしない「十九年七月十一日、歩兵第一三二連隊（弘前の東部第五十七部隊内）に入隊すべし」ということでした。

その頃は、まだ東條内閣の時で、マリアナ諸島が連合軍にやられている時期です。昭和十九年七月十五日、第四十七師団（弾兵団）の動員が完了したのです。師団長は渡辺洋中将で、我が連隊は営庭に整列して軍装検査を行って、直ちに出陣式となったのです。

歩兵第一三二連隊長、陸軍大佐重広三馬、第二大隊長乗上喜一郎大尉、第七中隊長前沢吉次中尉。この方々が我々の直属上官です。私は第三小隊長沢田寿之少尉のもと第一分隊長を拝命したのです。

連隊は甲装備で、三、八五〇名、出身地は青森、岩手、秋田、山形県の弘前師団（第八師団）管区と群馬、長野で、兵隊は現役兵、現役延期、除隊直後の者が大部分という、若手の多い精鋭兵団でした。

私はその時、二十八歳となっていたが、「ようし、

若い兵隊に負けないで頑張っていくぞ」と、もう想いは戦場に馳せていた。機密秘匿の出陣でしたが、夜の十二時頃、弘前駅広場は見送りの人で黒山の如くでした。その人達はやはり近親者が多かったためか、別れの言葉、励ましの声、制止も出来ぬ状態でした。私も、何処へ行くのか判らないし、これが家族との永遠の別れと思ひ、勇躍征途につく、とはいふものの、これが見納めかとの悲壮感もあり、今思えば複雑な心境でした。

ところが、列車は翌朝、八戸駅手前の仮停車場で止まり「下車」ということです。そこは八戸湾の西南海岸の北沼と呼ぶ砂浜地帯です。そこに駐屯、幕舎生活を営むのだというのですが、何故こんな砂浜でと、私ばかりではなく、皆思ったでしょう。

第四十七師団は、南方行き予定で、海上機動兵団なのです。南方諸島は連合軍に占領され、日本軍はだんだんと後退している時です。敵が上陸した所に逆上陸して、敵を殲滅するのが海上機動兵団の役目です。ところが、我々の弘前編成師団の大部分は、海でなく

土に親しんだ農山村出身者が勝手が違う。いくら、大本営直轄兵団だといっても訓練に不安があったことも事実でした。

そのうちに、七月下旬のこと雨降り続きで砂浜の上での幕舎生活は困難となり、八戸の国民学校に各大隊ごとに夜営することになる。学校は港の町の高台にあつて、八戸湾を眼下に見下せる眺望の素晴らしい所だつたが、海上機動隊の訓練は敵前上陸が主であつた。

漁船に乗り、大発に移る、さらに小発に移乗して、一挙に砂浜に突つ込む。装備は革製品でなく、水に入つても大丈夫なもの、上陸する時は銃を上へ挙げて水中を進む、といった訓練でした。

しかし、その訓練は七月下旬に中止、今度は海の訓練が山の訓練に変わった。場所は蒼前平と称する広大な、しかも起伏の多い原野である。多少の山村もあるが、そこで連日、個人壕のタコ壺掘り、偽装訓練、夜襲演習と、猛烈な演練の積み上げであつた。広重連隊長作詞の連隊歌の一節に

「鳴くなかもめよ今我は 降魔の剣腰に佩き

玉と砕けん心意気 軍旗の許に我れ征かん」

というのがある。我々は新しい軍旗を陸下より拝受し、この軍旗のもとで命を捧げる。いや捧げなければならぬのだと思いつつ、苦しい訓練に部下共々励んだのです。

我々は海上機動兵団として日々の演習に精を出し、出動は何日か、行先は何処かと思つていたが、十一月半ば、突如海上機動は解除し、中支行きとなつた。何か、後での憶測ですが、東條内閣は小磯内閣に代り、戦況も、大本営の方針も、政府の方針も、本土周辺と中国、満州に戦線を縮小しなければならなくなつた。ということでしょう。

今まで持っていた九九式の兵器は全部八戸に残し、丸腰で下関へ行つて兵器を受領しました。それは三八式歩兵銃、十一年式軽機関銃という、いわば旧式の兵器で、格納油（グリソ）のまま保管されていたものです。しかも、試射は船上でやれという。

十一月二十日、八戸を出発してから、下関で乗船、

釜山、朝鮮、満州、山海関を経由して、十二月揚子江

岸の漢口へ到着したのです。その間兵器の試射をしたのですが、海へ向けて射つただから観測しても弾着は不明、ただ弾が出るというだけの心細いものでした。

弾兵団は漢口で中支派遣の戦務第一歩を踏みだしたのですが、その直後、B 29爆撃機の延一五〇機という漢口大空襲にあったわけです。日本軍の航空機はほとんど無く、超高度のB 29には高射砲弾は届かない。中空で炸裂するだけ、まったく敵のなすがまま。見る間に停車場司令部は飛ばされ、渡河作業の工兵隊の装備は火炎の中、隊長以下数名の戦死を出した。我々歩兵は辛うじてタコ壺のお陰で無事であった。同日、漢口から揚子江渡河、対岸の武昌に移動して宝通寺に集結しました。

―漢口、武昌の空襲は物凄く、市街地全滅だったと聞いていますが、上陸早々で随分驚いたことでしょうか。これからいよいよ正江作戦に出発というところです、作戦地までの空襲は如何でしたか。

昭和十九年十二月二十五日武昌出発、米軍機の銃爆撃がはげしいので、岳州からは列車でなく行軍という

ことになります。岳州出発は、昭和二十年一月一日〇時です。昼間行軍は無理ですから、いよいよ夜間行軍です。他の二個連隊はまだ到着しないので、我々の第一三二連隊だけが先行したのです。長沙、湘潭、湘郷、永豊へと進んだのです。そこには約二ヵ月間駐屯し、その間訓練をしていて、三月三日頃でしたか、作戦行動が開始されたのです。芷江作戦とも、湘西作戦ともいわれているのですが、我々は「重慶作戦」といわれていて、いよいよ、蒋介石政権の首都、四川省の重慶を陥落させるのかと、身のひきしまる思いと、不安、困難さを感じていた。

作戦開始後の行軍では、B 25爆撃機、P 51戦闘機が低空で攻撃して来る。操縦士の顔が見えるくらい低く突っ込んで来る。落下傘爆撃とか、時限爆弾とかでの犠牲もあるし、機銃掃射では弾が当れば出血多量で死ぬ。

空襲もある戦場とはいえ、湖南省は、山の緑、水も清く、田畑もあり、木造の部落もある。私たち故郷の農村と同じように心安まる思いはあった。しかも二月

三月といふのに、シャツ一枚の上衣だけで過せる暖かさは、我々北国の者にとつては想像もつかない。戦に向かう我々にとつてこの一時は、想いは知らず知らずに東北に向けられていた。

永豊を出てから、山また山の山嶽戦にひとしい激戦が続けられて、洋溪に突入したのは、四月二十八日頃だったと思います。しかも、第四十七師団の後続連隊は来ず、我々の第一二連隊だけであつたようでした。

### 【解説】

公刊戦史によると、第二大隊は四月二十日朝、竜溪舗を出発、西進を開始、陣地を占領中の一個連(中隊)の重慶軍を夜襲により奪取したが、重慶軍は逐次兵力を増加し、約一個団(連隊)に達し両国対峙状態となつた。

第三大隊に対し重慶軍は迫撃砲、重軽機関銃をスクールのように浴びせて来た。弾薬は驚くほど豊富で、連続集中攻撃により付近の高地は焼野原となり、重慶軍は勇敢に突撃を反復し、戦闘は極めて激烈で、わが方の損害は続出した。

二十一日、昼間攻撃により逐次重慶軍を撃退、さらに夜襲により桃林東方高地を奪取して二十二日朝まで確保、午後第一大隊と交替した。第二大隊は当面の重慶軍兵力は優勢であつて、抵抗頑強であるから支隊主方面に転進した。第二大隊は第一線後方に進出した重慶軍を撃破しつつ、二十五日朝桃林付近に進出した。

第一大隊は二十四日夜牛壑高地の重慶軍を攻撃し、二十五日朝、その最高峰を奪取、引続き戦果を拡大した。

その後各大隊の戦闘状況を記してあるが、二十八日未明第三大隊は洋溪市に突入。夜洋溪北西台地確保……重慶軍は例の如くスクール射撃を集中、迫撃砲陣地は洋溪北方二キロ二七〇高地付近にあり、わが方の一発の射撃に対しても忽ち正確迅速な返礼集中射撃が来た。

射撃指揮の米軍将校が認められたとのことである。わが方は昼間は沈黙せざるを得なかつたので、夜になると各中隊は当面の重慶軍に対し挺進斬り込みを実施した。

二十九日の洋溪付近集結地に対する米機の攻撃は凄まじいものがあつた。天高い所は米機の銃爆撃により明け暮れたものである。これから後日は、日の出から日没まで視界の利く日は毎日空襲が続けられた。

「公刊戦史には毎日を細かく、大隊ごとに記してあります。戦闘の中で毎日を過ごしている隊員には判るわけがありませんので、直接体験した戦闘状況をお話下さい。

洋溪を確保して五月に入り北東の小波頭の反撃が強くなり、第二大隊が「十八日夜襲攻撃をもって撃破せよ」との命令を受けてこれを決行、占領して、連隊の進出を有利にしましたのです。

この夜襲が成功し、東の空が明るさを増した頃「分隊長、伊勢田上等兵がまいった」「なにー」と私は叫んだ。非常に真面目な上等兵で、分隊の先頭に立って後輩の指導に当たっている古兵であり、生死を共にする戦友でもあつたのです。「伊勢田、伊勢田」と叫んでも声がない、頭部直撃でした。愛妻の写真を胸におさめて、時折一人でながめている時もあった。私は

涙が止めどなく流れて、遺品と片腕を切つて大隊本部で処置してもらい、遺体は台地に埋葬したが、今でも只々冥福を祈っています。青森県の出身者です。第二分隊からの交代兵ですが、わが分隊兵ですから特に心が痛んで、遺族の方は今どうしているのかと思います。

この作戦中、ドラム缶爆弾を落とされ山は焼かれ、隠れ場所が無い。洋溪での一週間は、火や煙を出せば、空からも山からも猛撃を受けるので米は炊けず、いり米だけで過ごした。また弾薬も尽きてしまつて、攻められても射つ弾が多くない。敵は尽きることもなく射つて来る。

師団司令部によりやく連絡がつき、飛行機で補給してくれた。旧式飛行機だろうから、米軍機が来やしなやか、早く帰ってもらいたいと、ハラハラしていました。

連隊長は玉砕を覚悟したらしいが、大隊長がこれを止め、先に申した小波頭を攻撃、第二大隊が敵を押し、連隊の撤退を可能にしたのです。

六月に入り師団司令部は「洋溪を撤退し、湘潭に集結せよ」と命令し、我々は退つた。我々の四カ月間の山岳戦は、奥羽山脈のような山地を、歩兵砲などは分解搬送で山越えしたこともあり、困苦欠乏に耐え抜いて奮戦した。この湘西作戦も、六月十日、湘潭集結とともに終了の状態になりました。

その後、師団命令により、湘潭を出発、済南に向かつて北上して、岳州に到着したのが八月十五日。同時に終戦の伝達を受けたのです。

中隊長の指示によつて、幕舎後方の谷間に分隊長以上が集合した。「無条件降伏」「何、降伏だと」中隊長の伝達が終わらないうちに、我々皆地べたにうずくまつてしまつたら、中隊長は「現任務続行中である」と言つた。

―その時の心境は、私も体験しているので充分判りますが、その時の菊地さんの気持ちと、復員までの状況を聞かせて下さい。

支那の第一線の中支の奥地まで、心を無にして奮戦した目的も消滅してしまつた、何の為だったのか。あ

らゆる困難と戦い華々しく戦死した戦友を思い、無念やる方ない思いで一杯でした。ですから、終戦を知らされた時、誰一人として話をする者はない谷間での終戦伝達の模様でした。

八月二十三日、歩兵第一三二連隊の軍旗は湖北省黄坡県花石橋という所で、奉焼されました。旗手は秋田正少尉でした。宮中で拝受してから一年二カ月にならないのだから、皆感泣して、言語に絶するものあり、ということでした。

九月になつて岳州、漢口、徐州、済南と北上したが、その後、支那蔣介石軍から、山東省徳県付近の治安確保に協力して欲しいという要請がありました、在留邦人の保護につながるものだったのでその任務につきました。

昭和二十年十二月三十一日、済南西方の禹城で、第一大隊は共産八路軍の包圍攻撃を受け多数の犠牲者を出しました。その救援のため、急遽、徳県を出動し、二月三日禹城に到着したが戦闘は終わつていた。このように、終戦後蔣介石国民政府軍と中共八路軍との戦



いに巻き込まれ、戦死傷者を出したということは悔やまれてならないのです。

昭和二十一年二月二十五日、連隊長は済南集中營(收容所)の庭に全員を集合させ、決別の挨拶と復員後の我々に対する諸注意等の訓示がありました。その文が手許にありますので、一部を読んでみます。

〔諸子が毎日、毎日、待ちこがれていた済南出發が遂に訪れて来た。諸子の悦びは察するに余りある。八戸出發以來一年有半の思ひ出は余りにも悲惨であり、無慘であり、残酷であった。濱江の渡河、洋溪付近の戦闘で、わけても連続連夜の夜行軍は如何に辛かったことであろう。〕

今、自分は静かに瞑目して当時のことを回想すると、神々しい諸子の姿が涯しもなく浮かんできて「克くやつて呉れた」という感激の念で一杯である。

然も多くの者と別れて二度と会う機会もなく、實に生別即死別であるかと思えば、決別の情禁じ難さもある。

郷里に帰って野良仕事の傍ら、田の畔に腰を下して

一服やる時があつたら、忘れんとして忘れ得ざる思い出の「湖南小唄」を口ずさんで、諸子の上官を偲び、重広支隊を思い出して呉れ、その時は恐らく自分も故郷で一人淋しく東北の空を仰いで懐かしき諸子の姿を臉に浮かべ、遙か南の彼方を望んで湖南の春を偲んでいるであろう。

出征以來杳として便りもなく、来る日、来る日を不安と焦燥の中に送り、薄暗い電灯の下、囲炉裏を囲んで只管諸子の年老いたる親御、うら若い妻女、幼い子供等がこの復員の噂を聞いた時、その悦は如何ばかりであろうか。

然るに毎日、毎日寒空に晒され、門口に待ち侘びし甲斐もなく帰って来た我が子、我が夫は、変わり果てた白い小箱であつた時、それは又何という悲しい復員であろう。自分は今、此の悲惨な状況を頭に描いて心の臉をしばたいている。諸子も亦此の亡き戦友の遺族に対し、心からの同情を捧ぐることを忘れてはならない。

ここに合掌して亡き戦友の冥福を祈ると共に、諸子

の健闘を行く末永い前途の幸福を念願して決別の辞とする。

さらば諸子よ 出発だ 出発だ

復員の鐘が鳴る 否復興の鐘が鳴る

親愛なる諸子よ、御機嫌よう 諸子及び諸子の家族と共に一路平安を祈る

昭和二十一年二月二十五日

この連隊長の決別の話は静かではあるが落ち付いてはつきりと伝わって来た感じで、あの時の重広連隊長の眼は慈父の眼のようでした。その時の連隊で生き残った人は約九〇〇人だったと聞いています。

四月になって青島に向かって済南を出発、青島港から米軍の上陸用舟艇に乗り、四月二十日に佐世保に上陸しました。その時、つくづく、「国破れて山河あり」の詩を実感しました。

〔聴取に際し、菊地卯三の戦友（第五中隊）小野寺秀雄氏の助言があり、感謝します〕

## 軍医敗戦記

東京都 山崎義郎

―最初に簡単な軍歴を聞かせて下さい。

昭和十六年十月六日に、近衛歩兵第一連隊に軍医予備員教育のため衛生上等兵として入隊しました。

普通の兵科と異なり軍医になるための予備教育なので、いわゆる内務班教育というものはなく、従って往復ピンタとか鷲の谷渡りとかは味わったことはありません。習うことも学校で習ったことの復習のようなもので、後で見たり聞いたりした兵科の初年兵教育とは雲泥の相違でした。

教育期間も約一ヵ月ということで気分的にも楽でした。前期が隊内教育で、後期は世田谷の第一陸軍病院内の実地教育でした。

当時、日米間に暗雲が垂れこめ一触即発の情勢でした。下手をすると除隊、即日召集という事態になるか